

## スペイン語圏を知る本 (その53)

西川 和子 著 『オペラ「ドン・カルロ」のスペイン史』  
(彩流社、2009)

評者 坂東 省次

スペイン学で昨年(2009年)最大の収穫といえば『世界歴史大系』第2期14巻のうちの2巻を構成する『スペイン史1 古代・近世』と『スペイン史2 近現代・地域から視座』の刊行であることはいうまでもないだろう。『世界各国史』

(旧版)全17巻では、スペイン史は単独ではなく、イタリア史およびポルトガル史とともに、第5巻『南欧史』の1巻にまとめられて、1957年に刊行された。加えて編者はフランス史の研究者であり、まだスペイン史の研究者はいなかったのである。およそ半世紀を経ての快挙を、諸手をあげて喜ぶたい。

だがしかし、これで日本のスペイン史研究は頂点を極めたというのではない。スペイン史研究家の手によって本格的なスペイン史が書かれたというだけであり、まだまだ多くの仕事が残されている。たとえば、女王イサベル1世、フランコ将軍などスペインの生んだ偉人たちの伝記は、日本のスペインファンなら是非とも読んでみたい本であろう。それはさておき、すでにスペイン史はいろいろ出版されているが、学生には読みにくいものが多い印象を受ける。読んで感動する類の歴史書が少ないのである。そんな中でスペイン史の専門家はだして活躍する西川和子さんの活発な出版活動に言及しておきたい。

理系出身で現在特許庁に勤務する西川さんがいつどのような形でスペインと出会い、スペイン史の研究を開始したのか定かでないが、東京の出版社、彩流社から1998年に『スペイン宮廷画物語：王女マルガリータへの旅』を出して以来、『スペイン十八世紀への招待：宮廷画物語』、『女王王ファナ：スペイン王家の伝説を訪ねて』、『スペインフェリーペ二世の生涯：慎重王とヨーロッパ王家の王女たち』、『スペインの貴公子ファンの物語：レバント海戦総指令官の数奇な運命』、そして近著『オペラ「ドン・カルロ」のスペイン史』と、スペイン史研究者が誰一人挑戦しない分野に見事に切り込んで、おおきな成果を挙げてきた。お見事というほかない。

ガリシアの詩人口サリア・デ・カストロの研

究を続ける詩人の桑原真人さんもそうであるが、西川さんも昼間は会社勤めをしながらスペイン史の研究を続けている。なかなかできることではないだろう。

さて、本書であるが、ドン・カルロとはカルロス王子(1545-68)のこと。カルロス1世、カルロス2世、カルロス3世、カルロス4世といえばスペイン史を繕けばどこかに出て来るので知る向きも多いが、カルロス王子といっても一体誰なのか、見当もつかない人が多いのではないだろうか。カルロス王子がフェリーペ2世の長男で、カルロス1世の孫といっても、そんな子供がフェリーペ2世にいたことをむしろ疑ってしまう。

フェリーペ2世は4度結婚している。最初の結婚でポルトガル女王マリア・マヌエラとの間に生まれたのが、ドン・カルロス王子である。次期王位継承者という生まれながらに輝かしい未来を約束されていた王子は、同時に不幸も背負って生まれてきた。生来、肉体的にも精神的にも正常ではなかったカルロス王子は、スペイン王家の王妃を巡る父と息子の葛藤の物語に巻き込まれて、若干23歳の生涯を閉じる。フェリーペ2世の後を継いだのは、フェリーペが4度目の結婚でアンナ王女との間にもうけたフェリーペ3世であった。

黄金時代のスペインに、古今東西の人の心を動かすドラマがあった。ドイツの文豪フリードリッヒ・フォン・シラーが18世紀の終わりに『スペイン太子 ドン・カルロス』という題名の戯曲を発表し、19世紀のイタリアを代表する作曲家ヴェルディはオペラ『ドン・カルロ』を作り、それを21世紀のわれわれは舞台で見ているのである。

スペイン黄金世紀は歴史的ばかりでなく、政治的、社会的、宗教的などさまざまな面で興味深い時代であるが、当時の宮廷の内部の王族や大貴族の人間模様もまた興味が尽きないテーマであろう。

ばんどう しょうじ (教授・スペイン語学)